

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

楽読原文 三醉人経綸問答

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
中江兆民著 案読原文 三醉人経綸問答 (併録・中江兆民奇行談) 書肆心水  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

もくじ

楽説原文 三醉人経綸問答について

原文 楽説  
原文

三醉人経綸問答

中江兆民著

併録

中江兆民奇行談

岩崎徂堂著

161

127

11

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

三 醉 人 經 緯 問 答

南 海 仙 漁 著

南海先生性酷た酒を嗜み又酷た政事を論すると好む而して其酒を  
飲むや僅か一二小瓶を酙す時の醺然として醉ひ意氣飄搖として大虛  
よ游飛するか如く目怡ひ耳娛み絶て世界中憂苦ある者有るを知らず  
更ふ飲むと二三瓶あれハ心神頓ふ激昂し思想頻ふ空湧し身ハ一斗室  
の中にあるも眼ハ全世界を通觀し瞬息の間を以て千歳の前ふ溯り千  
歳の後ふ跨り世界の航路を指示し社會の方計を講授して自ら思ふ我  
は是れ人類處世の道の指南車あり世の政事的の近眼者か妄ふ羅針盤  
を執り其船を導きて或ハ礁か觸れしめ或ハ沙ふ膠せしめ自ら禍ひし  
人ふ禍ひすると實ふ憚れむ可きの至ありと然れども先生身ハ斯世界

S  
A  
Sh

om

樂讀原文

三醉人經綸問答

について

中江兆民の著作『三醉人經綸問答』（一八八七・明治二十年、集成社書店刊）は、近代日本がその出発点において抱え込んだ葛藤をうまく表現した名作として広く知られていますが、その原文は右ページのようなものであり、いま現在の我々にとっては実に読みにくいものとなってしまいました。その近づきにくさを憂えた桑原武夫・島田虔次の両氏によつて現代語訳が一九六五年に岩波文庫本で出版され、以後、『三醉人經綸問答』がどんな作品であるのかを知りたい人の大多数は、この両碩学による現代語訳を読むこととなりました。

ところで、翻訳というものは、それがいかに読みやすく、また文意を正確に伝えるものであつても、原文の味わいを伝えることは難しいものです。その文章が理論的な著述であるにとどまらない場合は、特にそう言えるでしょう。また、時代や作家の個性が文章表現に色濃く反映している、あるいはそれを読み取るべき作品の場合はなおさらです。

本書は、『三醉人經綸問答』をできれば原文で読みたい、ただ、あまり苦労してまで原文で読みたいとは思わない、という読者のための「樂讀原文」版です。「樂讀原文」とは、樂に読める原文というほどのつもりの造語ですが、文字づかいや句読点の表記を変えることなどにより、「原文」と呼べる範囲内でなるべく読みやすくしようと試みたものです。

ひと言でいえば、「声に出して読んだら原文と同じ」だが、表記が違うということです。表記変更の具体的なことについては次のページに記しました。

（書肆心水）

「楽読原文」の表記について

\*原文が読みにくいのには、次のような事情があると考えました。

- 一、難しい漢字語。（これについては、せめての事として、読み仮名を付けたり語の説明を補つたりしました）
- 一、句読点がない。
- 一、漢字が旧字体になっている。
- 一、仮名づかいが古いやりかたになっている。
- 一、送り仮名が、現代のやりかたに比べて多かつたり少なかつたりしている。
- 一、今でも平仮名書きではよく使う語が、漢字で書かれている。（例えば、其<sup>その</sup>、抑々<sup>そもそも</sup>、など）
- 一、平仮名に濁点がない。また、変体仮名が使われている。
- 一、漢字の語どうしが直接するのをなるべく避けるようには書かれていない。（例えば、南海先生性醜た……、唯名称を……、など）

\*これらの事情による読みにくさを緩和するために、次のような方法を採用しました。

- 一、旧漢字、旧仮名づかい、変体仮名まじりを、新漢字（標準字体）、新仮名づかい、普通の仮名だけの表記としました。
- 一、送り仮名は現代風に加減し、なるべく統一しました。
- 一、句読点、中黒点、スラッシュを補いました。
- 一、漢字で書かれている語を平仮名にしたもののが多数あります。
- 一、同じ語でも、それぞれの箇所の〈漢字／仮名〉の続き具合などによって、漢字のままにしてある場合と仮

SAMPLE  
Shoshi-Shinsu.com

名に変えてある場合があります。

一、読み仮名をルビで補いました。原文には読み仮名ルビは全くありません。

一、外国人名・地名などを片仮名表記したものと漢字で当て字表記したものは、現在言い習わされている表記のうちの、なるべく底本表記に近いものにしました。

一、言い換えや語義の注釈は、行内の（）でくくった二行割注として表記しました。

一、字義において通用する漢字同士の扱いとなつていてる場合、現在一般的なものの方に置き換えたものがあります。例えば、聯→連　劃→画　游→遊　洲→州　托→託　著→着（膠着など）　嚮（かう）→向（かう）。

一、異体字関係にある漢字を現在の新字体に変更したものがあります。例えば、讎→讐。

一、傍点はすべて本書発行所がつけたものです。平仮名に変えたことで別の読みにくさが生じてしまう場合に使ってありますので、原著における強調の意図ではありません。漢文訓読調の言い回しを平仮名にしたものなどに使用しています。

\*表記変更以外について次の点をおことわり致します。

一、校訂上の解釈が必要になった場合は、基本的に桑原武夫・島田虔次訳・校注の岩波文庫版にならいました。

一、原本には本文上部欄外に内容見出しのようなものがついています。これは廃止しました。「楽読原文」のあとに付録した「原文」の方で見ることができます。この見出しについては、右記岩波文庫版の解説（桑原武夫著）で次のように紹介されています。《本書には「目次」というものがあるが、実は内容を示すものではなく、眉批<sup>ひび</sup>をならべたものにすぎない。眉批というのは見なれない言葉だが、本文の上の欄外に記入された評言のことである。》

一、枠外下段の見出しは本書発行所が付け加えたものです。

## 楽読原文 三醉人経綸問答 内容見出し

南海先生 (12) 洋学紳士君 (14) 豪傑君 (14) 民主制 (15) 君主制 (15) 立憲制 (15) 非武装の文明化 (16) 理義と礼を兵備とす (16) 文明と野蛮 (17) 前代未聞の理想主義 (18) 進化の神と政治家 (19) イギリス革命 (19) フランス革命 (20) 無能なる末裔貴族 (21) 肉体同士は平等なり (22) 貴族発生の起源 (23) 世襲と遺伝説 (24) 遺伝説の例外 (24) 誉めある名 (25) 欧州諸国の形勢 (26) 自由は富強の基礎 (27) 自由は酵母のごとし (28) 学術と富国強兵 (28) 自由あっての学術 (29) 万人の自由 (30) 進化の理 (31) 動物的進化 (32) 人事的進化 (32) 政治的進化 (33) 腕力から君臣の義へ (33) 慈愛の心と感恩の心 (34) 慣れによる堕落 (35) 君主への権利譲渡 (35) 東西文明進化のズレ (36) 専制 立憲 民主 (36) 自由の先駆者、英國 (37) 立憲君主制 (38) 独立個人の諸権利 (39) 代議制議院 (39) 租税と私有権 (40) 思想と行動の自由 (40) 官尊民卑 (41) 役人根性 (42) 上に媚びて下に威張る (43) 自由に加えて平等を (44) 英国の立憲君主制 (45) 国王 国名 国境 (46) 立憲は春、民主は夏 (48) フランス民主制 (48) ナポレオン帝政 (49) 大国との道と小国との道 (50) 列強の植民活動 (51) 民主・平等・自由の制 (52) 道徳の園、学術の園 (53) 進化神の怒り (53) 民主制の短所 (54) 立憲君主制の長所 (55) 民主制の優越性 (56) 万国平和主義 (56) サン・ピエールの説 (57) ルソーの説 (57) カントの説 (57) 好戦的な帝王将相 (58) 道徳と法律 (58) 戦争の原因 (59) 民は戦争を望まず (60) 帝王に戦争被害なし (61) 法律による平和 (62) 補償困難な戦争被害 (63) 世界各国の情勢 (64) 独仏抗争の歴史 (65) 国民の国家 (65) 率制しあう大国 (66) 学士の説と現実政治 (67) 非武装の無抵抗主義 (68) 正当防衛 (69) 悪事に道徳で対する (70)

豪傑君の意見も語れ (71) 生物は勝つ事を好む (71) 学士もまた勝ちを好む (72) 文明国はよく戦う (73) 苦行中にも楽しみあり (74) 兵隊の楽しみ (75) 大将の楽しみ (76) 国家論と人性論 (77) 軍備は国力の結晶 (78) めざめる小国 (79) 豊かで弱い大国を狙え (79) 異邦に新国家を建設 (80) 旧小邦は切り離せ (81) 文明への長い道 (81) 文明購入は高くつく (82) 文明購入の資金調達 (83) 内政よりも先ず外征 (84) 文明化は国を二分す (84) 恋旧と好新の二派 (84) 世代間のギャップ (85) 少時の経験の影響 (86) 外との接触経験 (87) 州俗の影響 (88) 恋旧と好新との対立 (88) 二派対立は大病患 (89) 同一主義者中の分裂 (90) 革命また武勇の味あり (90) エセ文明政治家 (91) 攻撃的政論の快楽 (92) 恋旧・好新両派の性情 (93) 行政府内の両派 (94) 両派対立は国の危険 (95) 恋旧派を除くべし (96) 恋旧派は戦場へ送れ (97) 非常の変には非常の計 (98) 豪傑怪物は進歩の害 (99) 東洋に知的豪傑は僅少 (100) 政理と政術 (100) アジア、焦眉の急 (100) 独仏間の怨み (101) 独仏怨恨深化の事情 (102) ロシアとイギリス (103) 欧州各列強の思惑 (104) 英ロはアジアで競う (104) 小国はどうすべきか (105)

紳士君の説の要約 (105) 豪傑君の説の要約 (106) 兩人とも現在に益せず (107) 進化の多様なありよう (108) 進化神のにくむところ (109) 時と場所を知らざる非 (110) アジアの進化神 (111) 各国民に適した政治 (112) 進化の踏むべき順序 (112) 回復的民権 (112) 恩賜的民権 (113) 自由権を返還すべし (113) 現在は過去がつくる (114) 先走った観念的思想 (115) 思想は将来への備え (115) 両派共通の思い込み (116) 列強の勢力均衡 (116) 万国公法 (117) 列強は侵略に出るか (118) もし侵略されたなら (119) アジアの兵力 (119) アジア諸国の互助 (120) 中国と争うべからず (121) 虚声が恨みを招く (121) 戦をおそれて戦を開く (122) 清朝中国のゆくえ (123) 南海先生の結論 (124)

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

原樂  
文読

三  
醉  
人  
經  
綸  
問  
答

兆民  
中江篤介  
著

三醉人経綸問答

南海仙漁著

南海先生

南海先生、性はなはだ酒を嗜み、また、はなはだ政事を論ずることを好む。しかししてその酒を飲むや、わずかに一、二小瓶をのみほすときは、醺然として（ふきぢ）酔い、意気飄揚として大虚に遊飛するがごとく、目よろこび、耳たのしみ、絶えて世界中憂苦なるものあるを知らず。さらに飲むこと二、三瓶なれば、心神とみに激昂し、思想しきりに全湧し（ほんゆう）（めぐらし）、身は一斗室（いんしやう）の中にあるも、眼は全世界を通観し、瞬息の間を以て、千歳の前にさかのぼり、千歳の後にまたがり、世界の航路を指示し、社会の方針を講授して、みずから思う、我れはこれ、人類処世の道の指南車なり、世の政事的の近眼者が、みだりに羅針盤をとり、その船を導きて、あ

るいは礁(じょう)に触れしめ、あるいは沙(さ)に膠(こう)せしめ(浅瀬にの)、みずから禍(くわ)いし、人に禍(くわ)いすること、實にあわれむべきのいたなり、と。しかれども先生、身は斯世界(この世界)にあるも、心はつねに藐姑射の山(はこや)（中国で不老不死の仙人(人が住むという山)）に登り、無何有の郷(むかゆう)（自然のままでなれば、天地萬物の理想）に遊ぶがゆえに、その説くところの地誌、その述ぶるところの歴史は、斯ただ、先生の地誌にも、氣候寒冷の邦(くに)あり、溫暖(おんなん)の邦あり、温媛(おんなん)の邦あり、强大の国あり、弱小の國あり、文明の俗あり、野蛮の俗あり。その歴史にも、治あり、乱あり、盛あり、衰ありて、極めて斯世界の地誌歴史に切当する(せうとう)ことも、ままこれあり。またさらに飲むこと二、三瓶なれば、耳熱し、目眩らみ、腕奮い、趾(あし)あがり、發越飛騰(はつえつひとう)して、その末や、昏倒して前後を知らず。すでにして二、三時間睡眠し、酒醒め夢かえるときは、およそ醉裡(すいり)に言ひしこと、または、なせしことは、一掃して痕迹(ごんせき)を留むることなく、俗にいわゆる狐つきの落ちたるに似たり。先生の知人、または先生の人となりを伝聞するもの、先生醉裡の奇論を聴くがため、酒ひと樽、肴ひと籠をたずさえ、先生の廬(いおり)を訪い、共にさかづきを挙げ、七、八分の酔いを覗うて、ことさらに邦家の務めを話し出だし、先生の説を釣り出だして一時の楽しみとなすも

の、往々これありて、先生もまた少しくみずから省知せり（せいわい）。よつておもうに、吾れ近日また邦国のことを説話するときは、痛く醉わざるの前において、そのうち緊要の条項は一々記し置き、他日ふたたび取り出だし、敷演して一篇の冊子を綴成するときは、あるいはみずから楽しみ、人を娯楽（たの）めしむることを得ん、しかりしかしり、と。近日霖雨（りんう）もうもうとして連日開かず、情意鬱陶（ふえん）として極めて不快を覚えり。たまたま一日、先生、酒を呼び独酌（くわんぜん）してすでにかの醺然（くわんぜん）（酔に酔つて外れ）歩虛（歩に歩ひさま）の境界にいたりたる折から、兩人の客あり、金斧（きんぶ）と号する洋火酒（コハネシタク）をもたらしていただれり。先生いまだ一面の識あらず、またその名姓を知らざるも、その洋火酒を一見するや、早やすでに二、三分の酔いを増したる心地せり。その一人は、冠（かん）履被服（りゆひふく）ならびに（でみかなたま）洋装にて、鼻目俊爽（しゆじょう）に、軀幹頑秀（きわう）に（けいぢゅう）、拳止（けんし）發越（はつえつ）に（けいぢゅう）言辞明弁（げいじめいべん）にして、定んでこれ思想の闇（くろい）中に（くろい）生活し、理義の空氣を呼吸（ひきは）し、論理の直線（一直線）にしたじうて前往（こうじょう）して、實際迂曲（うきょく）の逕路（けいいろ）（ち）によるることをいさぎよしとせざる、一個の理学士（りがくしつ）（理學士）なるべし。いま一人は、丈高く、腕太く、面蒼く、目深く、飛白（ひしろ）の套（とう）や短後の袴（はかま）や、一見してその偉大を好み、奇險を喜び、性命の重きを餌にして功名の楽しみを釣る、豪傑社会の人種たるを知

豪傑君

洋学紳士君

るべし。坐、定まり、礼おわり、おもむろにかの洋火酒をかたむけ、賓主献酬してようやく佳境に入るにおよび、先生すなわち一人の客を呼んで紳士君と称し、いま一人を呼んで豪傑君と称して、その名姓を問わず。客もまた笑うて、あえて嗔らざず。しばらくありて洋学紳士にわかに云ひけるに、僕、久しく先生の高名を聞けり、先生の学、東西をかね、先生の識しき、古今をつらぬく、と。僕もまた宇内うだい（下大）の形勢においてひそかに看破するあり。願わくは先生につきて、ひとたびこれを質することを得ん。

ああ、民主の制度なるかな、民主の制度なるかな。君相專擅せんせん（まいつ）の制は、愚昧にして、みずからその過ちを覚らざるものなり。立憲の制は、その過ちを知りて、わずかにその半ばを改むるものなり。民主の制は、磊々落々らいらいらくらくとして、その胸中、半点の塵汚じんおなきものなり。

歐州諸国は、すでに自由、平等、友愛の三大理を覺知しながら、なにゆえに民主の制にしたがわざる邦国、なれども居るや。なにゆえに極めて道徳の義に反し、極めて經濟の理にそむきて、國財を蠹蝕としゃくするほむ 数十百万の常備軍をたくわえ、浮虛の功名を競うがために、無辜の民をして、あいともに屠斬とざんせしむるや。文明の

民主制

君主制

立憲制

運において後進なる一小邦にして、頭をあげてアジアの辺隈(へんわい)より崛起(くつき)し、がにわ

一蹴(いつしう)して自由友愛の境界に跳入し、堡壘(ぼうり)をたいらげ、煩穢(こうほり)をと

かし、艦を船にし、卒(卒)を人にし、もっぱら道徳の学を究め、工伎(こうじ)の術を

講じ、純然たる理學の児子となるにおいては、かの文明を以てみずからほこる歐州諸国の人士は、よく心にはざることなきや。彼れあるいは兎頑にして、心にはじざるのみならず、我れの兵備を撤するに乘じ、悍然として(かんぜん)來寇するときは、

吾が儕(わが) 尺寸の鉄を帶びず、一粒の弾をさしはさまず、迎えてこれを礼せば、彼れ果たして何ごとをなすべきや。剣を揮うて風を斬らんに、劍いかに銳利なるも、風の飄忽(ひょうこう) 茫漠たるをいかんせん(かんせん)。我れそれ、風とならんかな。

弱小の邦に拠りて強大の邦と交わるものは、彼れの万分为の一にも足らざる有形の腕力をふるうは、鷄卵を巖石に投ずると一般なり。彼れ文明を以てみずから誇れり。しかればすなわち、彼れもとより文明の原質なる理義の心なきの理あらず。しかればすなわち我が小邦たるもの、何ぞ彼れの心に慕うて未だ履行することあたわざる無形の理義を以て兵備となさざるや。自由を以て軍隊となし、艦隊となし、平等を以て堡塞(ぼうさい)となし、友愛を以て剣砲となすときは、天下あに当たるものあらん

## 楽読原文 三醉人経綸問答

や。もししからずして、我れもっぱら我わが堡壘ぼうらいをたのみ、我わが剣砲けんぱうをたのみ、我わが兵衆ひょうじゆをたのむときは、彼かれもまたその堡壘ぼうらいをたのみ、その剣砲けんぱうをたのみ、その兵衆ひょうじゆをたのむがゆえに、その堡壘ぼうらいもつとも固きもの、剣砲けんぱうもつとも利なるもの、兵衆ひょうじゆもつとも多きもの、必ず勝ちを得んのみ。これ算数さんすうの理なり、極めて明白の理なり。何を苦しみて、この明白の理に抵抗することを試むるや。彼かれ果たして兵ひょうを引きて、あえて我わが邦わに来たり拠くわらんか。土地は共有物こうゆつなり。彼かれ居り我われ居り、彼かれ留まるまり我われ留まるまらんには、何なんの葛藤かづかあるや。彼かれ果たして我わが田たを奪うて耕はし、我わが屋やを奪うて入り、あるいは重税じゆざいして我われを苦しむるか。忍耐力に富むものは、忍耐せんのみ。忍耐力に富まざるものは、おのののみずから計はかりをなさんのみ。我われ今日、甲の国に居る、ゆえに甲国人なり。我われ明日、乙の国に居れば、また乙国人ならんのみ。大劫会だいごうえの期(破滅の日) いまだいたらずして、我わが人類の故郷たる地球じきゅうなお生活する間は、世界万國みな我が宅地たぢにあらずや。

ああ、彼かれ無礼にして我われ有礼に、彼かれ非理にして我われ理がつに合あし、彼かれの文明は野蛮やばいにして、我われの野蛮やばいは文明なり。彼かれ怒りて暴ぬをほしいままにし、我われ笑うて仁じんを守らんには、彼かれ果たして我わをいかんせん。プラトンや、孟軻もうかや、スペン

サーや、マルブランシュや、アリストテレスや、ヴィクトル・ユゴー、我れを何といわんや。宇内万国の人、傍観するもの、これを何といわんや。ノアの大洪水以前は知らず、大洪水以後いまだかくのごとき先例あらざるは、眞に怪しむべきかな。  
何ぞ我れより古えをなきざるや。

(例せぬならがまつか)

豪傑の客はこの言を聞き、洋学紳士に向うていわく、君は狂せしにあらざるか。狂せり、狂せり。六尺男児、百千万人、あいあつまりて一国をなしながら、一刀刃を報ぜず、一弾丸を酬<sup>むく</sup>い<sup>づ</sup>して、坐ながら敵寇<sup>のたり</sup>のために奪われて、あえて抗拒せざるとは、狂人の所為<sup>しょい</sup>にあらずや。僕は幸いに、いまだ狂せず、先生もまた狂せず、他の同国人もまた狂せず。何ぞ紳士君の言のごとく……

南海先生、笑つていわく、豪傑君、しばらくこれを待て。紳士君をしてその論をおわらしめよ。

豪傑の客もまた笑つていわく、唯<sup>い</sup>。

洋学紳士また云いけるは、およそ政事家を以てみずから任<sup>たま</sup>するものは、みな政理的進化の神を崇拜する僧侶<sup>そうりゆ</sup>といふも可なり。はたしてしかば、ひとり意を現前に注ぐのみならず、また心を将来に留むべきなり。何ぞや。かの進化神は進むことを

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

好みて、退くことを好まずして、その進往するにあたり、幸いに道路坦直にして清潔なるときは大いに善し。すなわち巖石凸立して輪を礙え、荊棘(けいきよく)茂生して蹄(ひづめ)を没することあるも、かの進化神は、ほぼ沮喪(そぞう)することなく、さらにますます奮激し、趾(あし)をあげて一蹴(いつしう)し、踏み過ごして顧みずして、頑迷なる人民が、あいともに脳を裂き肝を破り、街衢上(がいくじょう)血を湛えて、いわゆる革命の活劇を演ずるにいたるも、かの神は当然の結果なりとみなして、少しも怯るることなし。ゆえに身を以てかの神に奉事する政事家の僧侶たるものは、まさに務めてあらかじめ巖石を去り、荊棘(けいきよく)を除き、かの神をして威怒を奮うことを要せざらしむべし。これ、進化宗僧侶の本分の職なり。巖石とは何ぞや。平等の理に反する制度、これなり。荊棘(けいきよく)とは何ぞや。自由の義にもとる法律、これなり。

英王チャールズ第一のとき、仏王ルイ第十六のとき、宰相・大臣、政柄(せいへい)をとるものの、眼を豁し胸を洞し(口を開き心)、早く時勢を察し、あらかじめ世運を料り、かの進化神のために道路を掃滌(そううき)することを知りしならば、何ぞ必ずしも禍乱を釀出するにいたらん。おもうに英國のことは、それ以前において鑒戒(かんかい)するところ(のいましめ)なくして、ひつきよう創始に属せしがゆえに、政綱を執るもの、あらかじめ備えを

なことを省知せしらずして、敗衄(はいじく) の禍いを取りたるも、なおすこぶる怨(ゆる)すべきものあり。仏国にいたりては一世紀の前、一衣帶水の外、現にイギリスにおいて慘烈の禍いありしを見ながら、恬然として悟らず、区々として姑息苟姫(こうゆ(ごき)の策をたのみ、歳月を玩愒し(はんがく)、一時を糊塗し、禍乱の症徴すでに発するにおよんでも、なおかつ疾を諱みて名医に依頼することなく、あるいは依違猶予して民心をうたがわしめ、あるいは抵忤触冒して(とうがく(くぼう) 情感的な) 民情を激せしめ、その末や無前の奇禍を蒸出し、膏血(こうけつ) 都邑に汎濫(はんらん)し、一国を挙げ、変じて屠場とならしむるにいたりたるは、はたしてかの進化宗僧侶の罪なるか。

さきに王ルイ第十五のとき、もしくは王ルイ第十六在位の初年において、宰相・大臣たるもの、仮に身を數十百年のちに置き、同心協力して一々旧規の陋(ろう)を除き、易うるに新國(しんとく)の美を以てせば、王ルイ第十六の末年にいたりては、ただ一步を進め民主平等の制に入るのみにて足らんのみ。王ルイはすなわち悠々然として議院に臨み、その冠を脱し、その剣をとき、ロベスピエール以下の人士を一揖(いちゅう)し(じぎをしつ)、温和の顔色にて微笑していわん、公ら、これを勉めよ。我れもまた民籍に入りて、国のために力をいたさん、と。よつて妻子をたずさえ、州郡沃饒(よくじょう)の地をえらび、山

水明媚の勝を下し、多く美田・宅を買い、優遊以て身を終えて、高踏勇退の美名をも後世にほどこすことを得たらんのみ。なお一言せんに、フランスをして前に英國の鑑戒ならしめば、その宰相・大臣は深く咎むるに足らずして、僕の論は、迂にあらざれば刻(刻詰方)なり。ただ、それ炳然たる鑑戒ありて、なお鑑戒することを知らず、前車くつがえりて、後車進めり。これ当時フランスの宰相・大臣は、好んで奇禍を後人に遺せりしといふべし。かの進化神を妨阻したる魔敵なりといふべし。王ルイを擠陥(せいかん)したる(おしおどしたる)罪人なりといふべし。

洋学紳士、さらに一杯をのみほしてまた云いけるは、いわゆる車は流水のごとく、馬は遊龍のごとく、高帽を被り、闊袍(かっぽう)を穿(うが)ち、大達通衢(だいつくわく)の中、男女雜沓の群を貫串し飛過して、顧眄(ごべん)せず。この人や、經世の才をいだき、治民の志を持し、天子をたすけて廟廊にはしるの宰相なるか。はた天姿機敏にして、よく時をうかがい、勢いを料り、賤買して貴販し、以て陶朱(陶朱は金滿家とて知られた人)の富を致せるものか。はた文芸の美、學術の巧、もとよりセルバンテスを奴(やつこ)とし、パスカルを僕(しもべ)とする奇傑の人士なるか。皆、しからざるなり。この人や、その遠祖某甲、かつて旗をとり、將を斬るの功ありしがために、爵位を授け、采地(さいち)を賜い、華胄連綿として今日にい

たり、すでに才識なく、また学術なきも、祖先の朽骨、時々光を墓中より放ち、そ  
の庇蔭をこうむり、無作無業にして坐ながら禄秩の豊かなるをうけ、醇酒を飲み、  
脆肉せいいにくをくらい、優遊として日を送る、いわゆる貴族と号する一種特別の物体なり。  
ああ、一国中かくのごときの物体数十百個あるにおいては、たとい立憲の制をもう  
けて、千百万の生靈が果たして自由の権を得るも、平等の大義すでに欠くるありて、  
その自由の権は真成の物にあらず。何となれば、我が儕（がとも）人民、朝夕勞苦操作  
し、その獲るところのいくぶんを納（な）れて租税に供するは、やむを得ざるところなり  
といえども、ひとり我が施政の事務を委託する吏人（やし）を食なうのみならず、あわせてか  
の無作無業の物体を食なわざるを得ざるときは、ついに眞の自由にあらざるなり。

王公貴人は脳髄廻転体の量、はたして吾が儕（せい）よりも多くして、かつ重きか。胃液  
の分泌、血球の發育、はたして吾が儕（せい）よりも富めるか。ガール（骨相医学を唱）をしてその  
頭腦（そうち）を相せしめば、はたして吾が儕（せい）に區別せんか。もし區別するとこらありとせば、  
その区別は、はたしてかの輩の利益となるべきものか、吾が儕（せい）の利益となるべきも  
のか。吾れ聞く、人類は前脳の發育さかんにして、獸畜は後脳の發育さかんなり、  
と。はたしてしからば……その生まるるや、はたして錦繡（きんじゅう）を衣て來たりて、吾が

儕のせいとく赤裸にあらざるか。その死するや、はたしてその骨と肉と朽壊せざるか、還元せざるか……もし百万数の国民中三人の貴族あるときは、九十九万九千九百九十七人は、この三人のために自己尊貴のいくぶんを毀損せらるるを免れず。これもまた算数の理なり、極めて明白なり……吾が儕人民や、貴族や、みな若干元素より組成したる同一肉塊なり。同一肉塊にしてそのあい会するや、我が肉塊は低頭してさしゆ  
 叉手し(両手を組み)、かの肉塊は竦立して(ちぢりつ)すこしくその頭を上下するのみ。あい話するや、我が肉塊はかの肉塊を呼んで「サヤ」と称して敬を致す。君の義なり。また、「モン・セニヨール」と称して敬を致す。また君の義なり。かの肉塊は我が肉塊を呼んで何と称するか……無礼のはなはだしきにあらずや。恥ずべきのはなはだしきにあらずや。

上古のときか、近古のときか、幾千年の前か、幾百年の前か、何の年にありしか、何の月にありしか、何の日にありしか。當時賢者あり、仁者あり。才あり、智あり、勇あり、能あり。このゆえにその人、公となり、侯となり、伯となり、子となり、男となれり。その人すでに賢者なりき、仁者なりき、才ありき、智ありき、勇ありき、能ありき。このゆえにその子、その孫、その曾孫、その玄孫、その耳孫、およ

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

併録

中江兆民奇行談

岩崎徂堂著

本篇の底本は、岩崎徂堂（勝三郎）著『中江兆民奇行談』（一九〇一年十二月十七日発行、大  
学館刊）です。兆民自身と家族の言行を記しているとは言い難い数篇は省略しました（目次  
に＊を附したものがそれです）。表記の方針は、上掲の楽読原文『三醉人経論問答』とおよそ  
同じですが、こちらは原文がほぼ現代文と同じようなものなので、平仮名に置き換える語は、  
楽読原文『三醉人経論問答』よりも少なめにしてあります。原文に句読点はありますが、句  
点は段落末尾においてのみ使用されるという当時ままみられたやりかたであるため、読点を  
句点に置き換えたところが多數あります。原文は、「序」を除いて読み仮名総ルビですが、い  
らずもがなのものは省きました。なお、個性的文章表現というよりは誤字とみなすべきもの  
と考えて訂正した語句が少なからずあります。例えば、風彩→風采、万場が整肅した→満場  
が静肅した、異表に出る→意表に出る、度狭→度胸、などがそれです。著者の岩崎徂堂につ  
いては、他に多数の著書があることのほか詳しいことは知られていません。

SAMPLE  
Shoshi-Shimpei.com

中江兆民奇行談

## 中江兆民奇行談 目 次

序	166
演壇に股引と印社纏の扮装	168
兆民と花嫁	168
親友の死去と香奠	170
牛肉店楼上に小便の悪戯	171
師弟奇縁の瘤	172
よく窮を助く	172
断りと廃止の標札	174
墓所に行くから失礼する	174
益田君 僕にも睾丸があるぜ	175
兆民と中村のつかみ合い	176
金時計と金煙管	177
*横山の議員競争と兆民の書面	*
陰囊と滑稽	178
兆民と存娼論	178
一言の挨拶なくして居間に通ず	179
栗原亮一に放屁を参らす	179
当選祝いの来訪者に兆民の大気炎	180
議会開設と議員の当選	181
豆喰い書記官の評	183
兆民と金玉均	183
空前絶後の論説	184
兆民、元老連を罵倒す	185
兆民と孝道	186

無言の議員	187
主義綱領は兆民の発意	187
紳 <sup>ジン</sup> ラシヤの洋服と兆民の駆けまわり	188
金儲けなれば犬殺しでもやる	188
後藤伯の葬式と生花	189
詐されつやつてゆくのさ	190
天水桶に飛び込む	190
紙屋を開業して失敗す	191
洋行中の沖と中江	192
三味線と越中節	192
先見の明に驚く	193
大政治家と近代の非凡人	194
唐人の書と益裁は大嗜好物	195
*入院中の小山、師の病いを苦にする	*
門弟、師の病床に泣く	196
兆民とぬれぎぬ	196
*小山と兆民の性行	*
仰臥の一癖	197
保安条例に会うて退去を命ぜらる	197
書斎中の仏 <sup>ブツ</sup> 書は真つ黒	198
児童の教育は放任主義	199
*小山の嘘叶 <sup>ウカガ</sup> きと兆民の賛辞	*
*病める小山、病める兆民を見舞う	*
悪腫はそもそも社会の罰か	199
*小山の葬式と会葬者の兆民談	*
兆民との愛子	200
兆民とその夫人	201

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

中江兆民奇行談

兆民居士の近仕 <small>エクジニア</small>	201
奇人の中井と寄人の中江	202
あれは中江篤介だ	203
雨戸の釘つけは来客の予防	204
兆民、大久保甲東に知らる	204
為替にて尻を拭く	205
芸者屋に飛び込んで三絃を教わる	205
兆民の著と井上悟陰	206
徳富蘇峰の兆民評	207
前には無礼、後には最敬礼	209
中江と呼ばずして禪衡 <small>ゼンボウ</small> と呼ぶ	209
参議にはこの中江篤介だ	210
兆民は立派な実業家だ	211
猶官熱の弊を論じ、かえつて謔り込まれる	211
菜つ葉ばかり喰つておるものば左様 <small>シラヨウ</small> も行かぬ	212
貴公には乃公の住まいが悪く見ゆるか	213
写真を取つて置くほどの人物でない	214
やむを得なければ医者になる	214
興国的人はみんな眞面目だ	215
無血虫には言うだけ損だ	215
政府の嘱託と仮語の翻訳	216
余をなぶるがために国民党をなぶるなけれ	217
自由党再興の趣意書は兆民の筆	219
兆民と選舉人	220
兆民と新演劇	228
兆民と角藤定憲	229
兆民との来歴	232

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 序

明治維新このかた、日に月に歐米文明の新空氣が太平洋を横ぎつて我が國へはいりこんできた。それからというものは一から十まで、何もかも欧化してしまったのである。

さて文明の輸入はまことに喜ぶべき事柄であるに相違ないが、また他の一方より見ると悲しむべき現象を吾人に伝えている。それはすなわち、世がすべて機械的に流れてきたことで、少しもその内容いかんを顧みない。いわゆる偽君子、偽学者、偽政治家などが統々跋扈<sup>ばっこ</sup>して、社会の表面に羽翼を伸ばすようになったことである。

彼らは少しも実力を養成しないで、いたずらに形式ばかりつとめて、その事に当たるとただ利己のみに奔逸して、眼中社会もなければ國家もない。正義公徳は日ごとに滅却せられて、まるで白昼強賊が凶刃をひらめかして、市中を横行していると少しも異つたことはない。

この時にあたり、濁流に投じながらも、よくこれと闘つて、そうして正義公道の旗下に毅然重鎮となつておつた兆民居士は、いまや病んで医治に道なく、空しく手を拱して死期を待つてゐる。なんと惜しむべきの至りではないか。

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

中江兆民奇行談

兆民は明治年代における一奇才をもって知られている。その仏<sup>フランシス</sup>学に通じ、漢学に博く、その瓢逸、奇突、天馬空を行くの文章をもって、自由、博愛、平等の主義を鼓吹し、またあるときは滑稽、諧謔、熱罵、冷嘲の言論をもって、守旧压制階級、ありとあらゆる旧社会の制度思想を打撃し破壊したところの一大功績者である。ことに居士が平素の奇行は、凡俗と大いにちがつて、実に兆民の兆民たる特性を示している。であるから、読者もし本書を沈思熟読したなれば、その中には幾多の趣味と、そうして真理とを発見しえらるるであろう。

余輩がこの著を公にしたゆえんは、ただいたずらに居士の奇行を世人に紹介して、それで満足するというわけではない。むしろその奇行中にかくれているところの趣味と真理とが、吾人に向かって、鉄鞭ともなり、良薬ともなることを知らしめんと欲したからである。

辛丑（明治四十年）の暢月（甲子）向島の陋居において

著者識

SAMPLE  
Shoshi-Shinsu.com

演壇に股引と印袢纏の扮装

明治二十二年のことであつたか、自由民権の主唱者が大阪に会合して、慰労会を開かれたことがある。当時兆民は大阪東雲新聞社にあつて、もっぱら自由民権を鼓吹せられておつたから、やはりこの会の一員として席に列したばかりでない、むしろこの会の主人公というてもよろしいのである。やがて席が定まり各自はそれぞれ演説することになつた。すると隅におつた兆民が、意気揚々と演壇に上がつたが、このとき満場をして驚せしめたのは先生の風采で、印袢纏に腹掛け、紺股引という扮装、まったく大工か左官としか見えなかつたのである。聴衆これを見て驚くものもあれば笑うものもある。喧声しばらく鳴りもやまなかつたが、大工左官の兆民が、諸君よ、といふ鶴の一声とともに満場が静肅した。それから滔々と自由民権の本旨を演説されたのである。そこでなぜに兆民の扮装が意表に出たかと問わば、ここが兆民の兆民たるところで、自由民権を主張するの手段として、大工左官などのごとき下級の人間もまた日本国民たる以上は、民権の自由を有するものである、ということを会得さるために、おのれがまず大工左官を形どつたわけであるそつだが、どうしても兆民は常人とは思われない。

兆民と花嫁

君が文部省に出仕しておつたときのことだが、親友の世話で、ある華族の令嬢を嫁にもらうことになつ

SAMPLE  
Shoshi-Shonan.com

中江兆民奇行談

た。その令嬢というのは妙齡まさに二八（にぱち）の春を迎え、花顏膩頬（はなはなめ）、一笑百媚、その嬪娟（ひめけんやみのまほ）たる細腰はじつに古えの小町も三舍を避くるほどのビューチフルで、おまけに才学衆に秀で、経済家政の道から裁縫遊芸にいたるまで、なにひとつとして知らないものはなく、才媛の名、都門に嘖々たる古今無類の優物であった。それであるから、才子通人、一度この令嬢が花顔を瞥見すると、魂魄（こんぱく）天にとびあがり、久米の仙人もまた転がり落ちんばかりである。ところがこの令嬢をもらうというご本人の篤介先生（だくすけさん）（本名の）、大よろこびであろうと思いのはか、一向ありがたがる様子もなく、地蔵の顔を蚊がさしたほども感じない。そのわけというは、先生、例の大抱負を懷にしておつて、早婚は出世の妨げであると悟つたからだ。しかし友人がせつかくの媒介であるから、その好意を無にするも氣の毒と、やがて黄道吉日というお定まりの佳辰（かじん）（がじん）をトして華燭の盛典（はなぢゆつてん）を挙げようとした。そこで友人連は君が平常を心配して、もしや粗暴不羈（ふき）（しゃぱりこうげき）の狂言をやらかした日には大変と、どうかおとなしく済ましてくれると頼んだ。先生、ただハイハイとそのとおり承知をしたので、いよいよ当日、友人といつしょにある楼でもつて花嫁の来るのを待つことになつた。そのうち酒が出る、肴が運ばれると、たちまちおのの本性を現わして、端唄、都々逸（どどいつ）、二上り三下り、甚句もやれば詩吟もはじまるという騒ぎになつた。ところへ女中が取り次いで、ただいまお嫁さんがおいでになつた、と告げる。すると一同、いよ、待つてやした、篤介お楽しみ、なぞと酔いに乗じて君を冷評するので、四面楚歌の中に包まれた項羽にあらぬ兆民はムツとしたらが、もつて生まれた不撓豪放、千鳥の足を蹠蹠かせ、自身たつて花婿様がお出迎えしようと玄関へやってきて、令嬢をひっぱつて座敷に着かせ、杯を取りかわして平気にすましておる。こちらは令嬢、両の頬を真っ赤にして恥ずかしがつている。すると篤介、しゃがんだかと思うとおのれが續鼻褲（ふんぱうし）を引き外し、

股間に垂れ下がっているところの陰嚢の、その大きさというたら金着のようで、色まっ黒になつて漆みた  
ようなやつを両手でもつて引き延ばし、一同を眼鏡ごしに睨んで、ちょうど今は冬であるのに「おれは一文  
なしで何も花嫁にやるものがない。ただここに一つの睾丸火鉢があるから、これをやろう」と、令嬢はそ  
れを見て顔をそむけ、知らない風をしておる。すると友人のひとりが、君の待遇は結構だが火の氣のない  
火鉢では仕方がないから、これをおいて大いに令嬢に馳走しろ、とすぐそばにあつた火鉢の真つ紅になつ  
てる火をはさんで篤介に戯ると、先生、よしきた、この上へ載せろ、とますます陰嚢を伸張する。朋友もま  
た酔つてゐるものであるから、拳古ほどの大きい火を陰嚢の上へ置くと、篤介、あついッと飛び上がって一  
同を残してどこかへ逃げて行つてしまつた。驚いたのは令嬢で、そうそう裾をけつて帰つてしまふ。その  
翌日になると使いが兆民の邸へ来て、縁談の儀はお断り申す、と言つて行つた。先生、べたと手を拍つ  
て哄笑一番、己のが謀りごとは大的りであるわい。

### 親友の死去と香奠

SAMPLE  
Shop-i-Shinji.com

兆民は元来磊落で無頓着な男だということは世人がよく知つておるが、さてそれについて面白い話があ  
る。あるとき君の親友が病いに冒されて、しばし衾にあつたが、ついに薬効がなくして遠逝不帰の客と  
なつてしまつた。彼はこの報を耳にし、それは大変な事ができたと、ただちに黒水引と白紙一枚を懷にし  
て、死んだ友人の宅にかけつけて未亡人に對し、いと丁寧に弔辞をのべただけは普通で面白くもおかしく  
もないが、それから挨拶が済むと、君は未亡人に向かい、語を次いでいうのに、少々お願い申したいこと

中江兆民奇行談

があれば、別間にご案内を頼むとのことに、未亡人は何やらんと怪しみつつ君を別間に導き、他見を避け  
てあり対し何ごとかを問うた。すると君はいう。ただいま至急金円の必要を感じたが、どうにも差し支え  
たなれば、かさねがさね申しわけなけれども金二両貸してくれよ、と申しこんだ。これを聞ける未亡人は思  
うに、中江さんはあまり察しのないかたである。場所もあるうものを、今ここにて金を貸せよとは、いか  
に我が夫と親密の間柄とは申せ、礼状を知らざる人であると、心中大いに立腹してみたが、また思いかえ  
し、磊落で何ごとも頓着せないかただとは常に夫からも聞いておつた、やむを得ないから用立ててやろ  
うと、ただちに申し込みの二両を貸してやつた。ところが先生は、どうもすまぬ、といつて別室におもむ  
いたが、やがて懐中しておつた黒水引と白紙を出して借りた二両をその中に包み、靈前に戻り再び未亡人  
に向かい、これは香奠の印であるから取つてくれると出したそうである。

### 牛肉店楼上に小便の悪戯

君が東京におつた時分、ある晩芸者を呼んで、どこであつたか酒を呑んでおつた。すると、そのとき  
ジヤーンとぶつかつたのは三番(火を知らせるの鐘)なので、家中騒ぎだし、芸者連も欄干へ出て眺めておつた。  
先生、泰然、他の火事には驚くことはない、と座敷の真ん中に座つてると小便が出たくなつて堪らなく  
なつてきた。けれども先生、二階を降りて下まで行くのは面倒だから何かうまい法はあるまいかと傍らを  
見ると一つの火鉢があつた。先生、こいつは奇と、前後左右に気を配り、その上へまたがつて恐る恐る小  
便をしてしまつとたんに、火事を見に出た芸者が戻つてくると、ブーンと臭氣においから、オヤ変な香においがする

こと、チョイとどうかして、と聞くと、先生、知らない風をしては、ほんとだ、なんでも鼠が小便をした  
ような寸法だな。どこまでも眞面目を装うておつたとは、見かけによらぬ悪戯者である。

### 師弟奇縁の瘤

中江兆民と弟子の小山久之助とは不思議にも頸部にリンパ腫、いわば瘤こぶができる、これがために苦しめられた。奇縁にも不治の病氣に取り付かれて橋本医伯の治術を受けておるが、そのうちでも兆民の疾やまいはとうてい不治と診察されたばかりでない。永く活きたところが一年余半しかあるまいと言ひ渡されたので、兆民もここに度胸をきめたと見えて、この世の別れに『一年有半』という書を著し、吾人にそれが片身としたのである。彼が著のうちにも弟子の小山が同じ病氣に罹つておるとゆうことを聴き込んで書を送つたが、滔々とうとうたるこんにちの濁流中にあつてこれらのごときは純粹愛すべきもの、こいねがわくは余の疾やまいのごとく不治の症にあらざることを望むと繰々かづけんの情を漏らしておつたとは、師弟の関係としてもつともの次第である。ところが小山はこれを耳にしていうのに、乃公はまだまだ死なんつもりじや、死ぬべき時は来ぬ、と豪語一番したという話であったが、計らざりき、彼は師に先だってこの世を去つてしまつた。先だたれたる兆民が心中はいかがであろう。吾人はこれを察して深く同情を寄するにやぶさかならざるものである。

よく窮きずを助すすく

SAMPLE  
Shoshin-shimizu.com

中江兆民奇行談

およそ社会の物と人とを問わず、兆民の手にかかるては、ことごとく罵倒されてしまうところを見れば、なんとなく兆民は酷薄の人間のように思われるが、それはまったく皮相の見で、兆民の一面はどうしてなかなか多情多涙の男である。その証拠には兆民のために助けられたものが世にすくなくないのである。いま参考までに示しておくが、あるとき小池政吉という人が友人の借金を保証したところから、期限がきても本人が返却しないので、いよいよ保証人の小池に弁済を迫ってきた。が、保証人も当時種々差し支えることがあって、どうあっても保証の責めをまつとうすることができない。というて棄てて置いたら、いつ差し押さえの運命に接するかわからない。さあ、そうなつてみると小池の信用も地に落ちてしまつて、再びこの信用社会に出ることが叶わない。どうしたらよからうかと、かれこれと思案してみたが、別に司馬温公や陳平の知恵が浮かんでこないので、これは致し方がないから兆民先生のところへ参つて名案を教えてもらおうと、それからすぐ先生を訪うて、親しく右の次第を物語つたところが、先生のいうのに、なるほど事實を聞けば實に氣の毒のことである。しかし前途有望の身をもつてかかる災難に会うては君の信用もまつたく失墜してしまうのである。ひとたび余の耳に入つては決してこれをだまつておる訳にはゆかない。よし、毫も心配するには及ばない。乃公がなんとか都合して皆かえしてやるから、と言わされたので、小池もありがた涙にむせび、天を仰いで先生の慈悲心の深きを謝した。そのうちに、ちょっと待つておれ、といつて兆民はいづれかへ行つたか例の金を調達して帰つてきたが、小池に向かい、これをやるからすぐ返せ、と言わされたので、さすがの小池もここにまつたく危急を救われたという話であるが、氏は会う人ごとに、この事實を物語らるるそうだ。

SAMPLE Shosha Shinsu.com

断りと廃止の標札

君が曾根崎におった時分(明治、廿年)には、中江篤介の名というものは非常なもので、政客、官吏をはじめとして、農、工、商の人々や、俳優、落語家にいたるまで、みんな君が奇行を聞き、どうかして一度は面会しておきたいと、門前まるで市をなすほどであった。そのうちで君はいちばん書生をかわいがった。すると四方のヘコ帶連がドンドン君のところへ押しかけて来て、学費をくれろというのもあれば、飯を喰わしてくれと頼むもある。先生、そこで財布をさかさまにし、米櫃(こめびつ)を叩いてかたっぱしからその窮してる奴を救つてやつた。ちょうど二年余もこうして続けたら、その世話したものも何百人というほどであつたけれども、どうした事が一人として出世したものがない。先生、そこで大いにこれはだめだわい、と悟つたので、やがて戸板ほどもある大きな板へ、

一、食客の御世話は近來相(あ)廃止(もうしそうり)申候(もうしそうり)、

一、金銭の御相談は門前より御断(おことりもつ)申候(おことりもつ)、

と墨黒々と書いて張り出した。これからしてぱつたり書生の来るのがやんだ。しかしてこの標札は今でも同村の酒屋の大塚というものがしまつておるそうだ。

墓所に行くから失礼する

SAMPLE  
Shoshi-Shinji.com

中江兆民奇行談

九月十日（明治四十年）泉州の客舎を辞して小石川武島町の自宅に静養中である兆民居士は、日ごとに重病になってきたが、昨今はほとんど呼吸にたえぬありさまとなつた。そのはじめ東京に帰つたということが諸新聞に現われると、居士の門弟や知友は車を飛ばして病床に見舞うもの、ひきも切らざる姿であつた。先生いちいち来客に接して筆談を試むるが、あまり長くなつても客が気がきかして帰らないと、先生は立ち上がるかと思うと、墓所に行くから失礼する、と言いつつ、おのれの書斎にはいりこんでしまうのである。はや先生は、おのれの書斎たる四畳半を墓所として、すでに千万億土にでも行つたつりになつておるそうちだが、訪う人ごとに書斎を指して墓所だと語られておるのは、どうみても尋常人でない。

### 益田君、僕にも壇丸（さんたま）があるぜ

あるとき、山県少太郎、小池政吉、伊沢芳造などがマンガン会社の創立を計画し、まず中江兆民を引いて社長とすることになった。そこで小池が兆民を訪問して承諾を求め、そのうえ先生の尽力をもつて実業界の名物男である益田克徳を株主の一人にしようと話すと、先生のいうのに、それはもつともだ。ついては、これからすぐに益田のところへ行つて談判することにしよう、といふので、小池が先生にしたがつて益田を訪問すると、兆民は益田に向かつて、君、僕らは国家事業たるマンガン会社を創立するつもりだ。モー早や、沖（守固）や平野（長祥）榎本（武揚）なども国家事業であるから何の文句もなく株主を承諾してくれた。君もマサカ不賛成とは言うまい、と一発を放つたところが、益田はしばらく考えておつたが、兆民に向かい、国家事業とあらば何も賛成しないとはいわぬが、全体君は文筆に生きるべき人

で決して実業界の人でない。しかるに君が今この会社を創立するというのは、そもそも量見ちがいだから一層やめるほうがよいと、かえつて反対に意見されてしまったので、兆民ムックと立腹して、乃公は国家のためとあるなれば何でもする。決して私欲私利のために働くのではない。国のために倒れてのち止むの決心だから、君も強いて賛成しろ、と勧めたけれども、頑固の益田はどうあっても承知しないで、二度も三度も兆民に同じような意見をしたのだから、兆民はころえきれなくなつて、益田をにらめつけ立ち上がつたかと思うと、益田君、乃公にも辜丸があるぜ、と言いつつ、なんの挨拶もせないで帰つた。

### 兆民と中村のつかみ合い

世間から聖人ともいわるる中江兆民がつかみ合いをしたことがあったとは、まことに珍しい話であるが、あるとき川越鉄道を計画し、賛成を求むるために中村元雄を訪問した。彼はかつて千葉県に知事を奉職したこともあり、かつ官界にあつた時分から兆民と懇親を重ねていたのである。君はまず中村に向かつて川越鉄道計画の旨をのべ、次いで賛成協力のことを求めた。すると中村は兆民に向かい、君の話ばかりで深く解しがたい点もあるから敷設の図面を見せよ、と反問したとき兆民のいわく、どうも君は困難いことをいう男だ、解らなければ解るように説明してやろうと、それから人さし指に唾をつけて、よりかかっておつたテーブルの上に図を書いて、これこれだと説明し、サアこれでよく解つたろうから賛成せよ、とキリ込んだので、中村はいわく、どうも即席地図は自身には都合がよからうが、他のものには一向に解らねえとあざけったので、兆民大いに怒り、乃公は新聞記者の古参であるから世の中のことは何でもよく

中江兆民奇行談

知つておる。貴様は何も心配せずに賛成しろと責めかかると、中村もさるもの、なかなか承知せず、貴様もそうでもあらうが、乃公おれも官吏の古参ふるてであるから貴様のいうことを一々承諾するわけにいかない、と言ひ放したので、それから互いに敗けず劣らずヘラズ口を叩き合い、果てはつかみ合いとなつたところへやつて来たのは例の大倉喜八郎であつた。彼はこれを見てただちに引き分け役となり、ようやく納めたりえ、事の詳細を聞いてみると右の次第と分かつたので、一座大笑いして別れたそだ。

### 金時計と金煙管ぎせんぐ

兆民が無頓着という事実は世にかくれもなき話であるが、彼は常に蓬頭、乱髪、垢つきたる衣服を着けて少しも修飾することをしないのである。しかるに、ここにおかしいのは、胸間にきょうげん閃々と金鎖を以てつなげる金時計をかけ、そのうえ破れた煙筒きせるづつの中に純金の煙管ぎせんぐを収めておるとは、彼が服装に対しても、いかにも不似合いとしか思われない。そこである人がこれを見て大いに怪しんで、君もまた裝飾を好むのであるかと質問の矢を放つた。ところが君はさも御笑おわかしげな顔をしておつたが、しばらくあつて答えていうのに、これは決して裝飾を勉むるために決してあるわけがない。不意に金錢かねを要することがある、そのときにはこれを典売てんばいして金に換える用心のためである、といわれたそだが、思えばこれももつともの次第である。ところがのちに金鎖も典売し、金煙管も処分してしまつた。今は例の金時計しか残つておらないので、古びたる羽織の緒に金時計を結びつけて以前のごとく胸間に掛けておるとは、風流といおうか、はた何といおうか、少しく著者の評しがたいところである。

## 陰囊と滑稽

兆民（ひんのう）が陰囊（いんのう）の滑稽はまだ他にもある。先生、あるとき宴会へ出かけていった。居常から奇行をもつて鳴つておる先生、ようやく酒がまわって来ると、諧謔、奇稽、忽如として天外より落つというようなわけで、すこぶる大陽気であつたが、たちまち起ち上がり、両手でもつて自分の陰囊（いんのう）を引き広げてほとんど杯のようにして、酒を注いで芸者に呑ませた。芸者もさるものさ、ありがたそうに恭しくそれをグットひと飲みに干してしまい、さつそく先生ご返杯いたします。婢を呼んでお燭のすこぶる熱いやつを取り寄せ、先生が陰囊（いんのう）の杯へツーと注いだ。さすがの兆民先生もこれには驚いて、一声熱いッと天井までも届かんばかり飛び上がって、宥せ、宥せ、宥せ。

## 兆民と存娼論

娼妓の自由廢業が一時流行すると同時に、廢娼論者は機失うべからずとなし、自論を鼓吹したのは、最近の歴史として吾人の脳裏を脱却せないところである。そこで兆民の意見をきくのに、目下のありさまではどうしても保存しなければならない。しかし保存して置くについては、娼家の建て方を改良し、無意の人を誘惑することのないようにするのが必要である。よろしく道徳が大いに進んで、いわゆる偽君子なるものがことごとく眞の君子となり、今の小人がみな柳下恵（のむぎのわきのけい）（時代の賢者）となつたときにはじめて娼妓を全廃

SAMPLE  
Shibashi-Shinji.com

するがよいのである、と言われたが、さすがは学者として、政治家として首肯すべき説である。

### 一言の挨拶なくして居間に通ず

兆民の磊落無頓着なことは今さら著者が吹聴するにも及ばぬが、こんなに遠慮も会釈もない先生は少ないと驚かれた話がある。あるときマンガン会社の創立について榎本子爵を株主にひっぱりこもうということにきまつて、いよいよ兆民と小池政吉の両人が子爵を訪問するわけになつた。そのとき小池は兆民を案内して小梅の子爵邸に行き、まず刺しを通じて、それから親しく子爵に熟談しようと思つておつた。ところが案外な話であつて、玄関に行くと兆民は遠慮も会釈もなく、榎本の居間はどこかと言うさま、つかつかと上がりこんで、とうとう子爵に会つてしまつた。驚いたのは同行の小池で、あんなありさまでは定めて子爵にお気障りでもしたろうと、恐る恐る間に通じてみると、あることがあるまいことか、今度は兆民あぐらをかき、子爵と話をしてるので、さすがの小池も二度びっくり、なんの辞もなかつたとは、本人の親しく余に語られたところである。

### 栗原亮一に放屁を参らす

中江が帝国自由党に籍を置いた時分から、栗原亮一とは親しかつた。あるとき栗原が支那から帰つてくるとすぐに君の寓を叩いて門前から大きな声で、支那のお土産を進上しようといながら、ズンズン奥の

間へやつてきて、いきなり四ツン這いになり豚のなき声をやらかした。すると篤介、いや、これはありがたい、さつそく頂戴しこう、その代り「おれもまた君が無事に帰ってきたのを祝つてやるうと、たちまち尻をまくつてブーフと一発屁を放した。臭氣紛々、鼻を殺くようで、さすがの亮一もこれには閉口した。

### 当選祝いの来訪者に兆民の大気炎

中江が初期の議員選挙に大多数をもつて当選されたので（明治年）、ある人が君を訪うてこれを祝した。すると君は氣炎万丈といふありさまで、得意然と左のごとく語られた。

彼が折指えば、はや一年の昔であった。東の空に保安条例という世界無類の大風が吹いてきた。それがために荒くれ武士をピュピュと片っぱしから吹き飛ばし、地震、雷、火事、おやじにビクともせぬ予さえ、この国には側杖喰つて吹き飛ばされ、老母と一人の娘（娘とは親戚から當時あずかりおりしものを言つたのである）を引きつれ、風のまゝに西をさして、ついに大阪へ舞いさがり、手内職に新聞屋となり、白痴威しの理屈を言い、口から出まかせの法螺を吹いて日を送つていたが、不思議にも理屈や法螺が関西人の気に入つたか、それからは中江中江と、あちらこちらから持てるようになつて來た。すでに今度の候補者競争のときなども予は東京で昼寝をしておると、サアこちらは大変、新聞仲間をはじめとし、代言の連中、豪農豪商の紳士たちまで、鼻の先に火がついたように悶きまわり、帝国議会に出ることを竜が天に昇るがごとく人間最上の名誉と心得おるが、あたかも我に当選を与えよという、もししからずんば死を与えよ、という意氣ごみで騒ぐ。何をそう騒ぐのだか本気の沙汰とは思われない。なるほど、議会に出るは

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

中江兆民奇行談

マンザラ借錢取りにつけ込まれるようにはないが、なにもそんなにムシリ合うて見つともない真似をせずともよろしい。自分などはこれを見て、アアよせばよいがよいがと、他人の事ながら氣を揉んでおった位だから、予は初めから議員などになろうという望みは毛頭なかつた。ところが、いつの間にやら納稅額は十五円以上となつておる。予は、ソレ君らもご存知のごとく納稅額十五円はさておき五十錢おさめるだけも地面などは持つておるものでない。しかるにかく急に金持ちになつたのは鼎肩ひいきの人が周旋してくれる、続いてなんびとか知れぬが投票して下さつたのでトウトウ当選したは仕合させだが、実は国会に出るには洋服を着けねば恰好が可笑しかろうと思うて、その着物の算段をしておるところだ。しかしどにかく犬も歩けば棒に当たるというのは予のことだろう。そこで予は处世哲学の一大原則を発明したが、なんでも世の中は法螺おがをふいて嚇おどかし、時々はワイワイ騒いで、そして御自分の姓名を吹聴するのに限る、と氣炎万丈であつたが、これを聽ける客はますます感じ入つて引き下がつたそつである。

### 議会開設と議員の当選

今は昔、二十三年の国会開設を吾人に伝えた時分には、官吏となく、政治家となく、実業家となく、上は閣員より下は馬夫走卒の輩にいたるまで、さも事めずらしげに議会の開設を待ちうけておつたのである。いざ七月の二十日は全国あげて議員選挙を行なうという法律が發布されたので、野心家はそれぞれ初期の新舞台に現われようと、運動準備に余念がなかつた。いよいよ選挙の日が迫つてくると、運動ますます急に、競争甚だ激烈となつたのである。中にも栃木県の第二区などでは、競争の結果、反対派と砲煙を交え、

時に血の雨を降らした。神奈川などでも競争また甚だしく、横浜市内のことは壮士各所に横行し、あるいは某所に会合し運動に熱中したが、そのうちに決死同盟会本部なるものを設けられて、会員はみな死を決し、かつ、

国を○るの○○

改進党員○○○○

右を衆議院議員に選挙するものは天に代わってこれを誅す

決死同盟会本部幹事

などという標札を各所枢要の戸板に張りつけて選挙者を威嚇したるなど、当時のありさまを追想せば身の毛もたつようである。そこで中江兆民も大阪府の第四区から代議士に選出されたが、元来同区は西成郡（こうぐう）、東成郡、住吉郡の三郡からなつておるので、そのときの候補者として自由党の栗原亮一、中江篤介、改進党の佐々木政行、中立の織田純一郎、北村佐吉の五人が目立たれておつたのである。いずれもみな、これ天下の俊物というてもよろしい。やがて選挙の日がせまつて来ると、佐々木、織田、北村などは運動に着手ははじめたが、兆民は別に議会の人となろうなどの野心は毛先ほども持つておらなかつたばかりでない。例の一文なしであるから、どうして十五円の被選挙権がない。資格をそなえぬのである。ところが衆望は恐ろしいものだ。選挙区民はどうしてもこの中江をして我が区民を代表させねばならぬといつてきかない。する内に同志の士が多くなつて、いよいよ一致をもつて中江を選ぶことにつきまつたが、さて兆民の身の上から財産を調べてみるとなんでもない。これでは何よりの被選資格を作つてやらなければ大変だと、区民は先ずその財を分かつて兆民の有と登記（ゆうき）したとは、なんとなく滑稽じみた話である。ところでご

中江兆民奇行談

本尊の中江はとんとそんなことはご承知ない。平気の平三で東京にのぼつておる。用を済まして帰つてみると、代議士に当選されたというあります。さすがの兆民先生もアッケにとられて開いた口が閉がらない。遂々当選を承諾した。思うに当時全国各区の選挙競争の臭態見るあたわざるに引きかえ、兆民が選出されたときの情況はいかがであろうか。かれはみずから国民の代表者たらんと欲して選挙場裡に出陣し、これは知らぬまに区民より推挙せらるる。二者の事実の相違はじつに雲泥もただならぬのである。

### 豆喰い書記官の評

君が元老院書記官を勤めていた時(八九零)の話であるが、常に汚れた(ひよそもの)單物の上に小倉袴を着け、おまけに煎豆を袂(たもと)に入れて官署へ出かけるのである。そこで傍らの同僚が、なんのためにかく君の袂がふくらまり重々しいのであるかと怪しんで、君の举动に注意してみると、計らざりき、先生暇さえあれば袂から例の豆を出してはポソリポソリと喰つておる。驚いたのは属官で、いや今度の書記官殿は豆を噛みながら事務をとつておると、異口同音に騒いだので、たちまち院内の評判となり、ついには豆喰い書記官とあだ名されたそうだ。どこまでも中江の素行は尋常でない。

### 兆民と金玉均

兆民と岩田周作（金玉均(日本に亡命家)をいう）とは非常に親しい仲であった。ところであるとき岩田が

兆民を尋ねて、しきりに北海道行きを勧めたのである。兆民、はじめのうちはあまり望みもしなかったが、岩田がさも愉快げに、さも面白げに北海道の状況をはなしたので、とうとう岩田に釣り込まれて北海道に行くこととなつた。それから岩田もいっしょに北海道へ赴きて、小樽に腰を据えたが、間もなく同地の北門新聞社では非主筆になつてくれると懇々に頼まれたところから、やむなく承諾することになった。しばらくのあいだ主筆で勝手なことを言つておつたが、面白くないので、これもまたやめてしまつた。そのあいだ常に金玉均の岩田にあい交わつて、彼のために直接間接に尽力したことが少なくなかつたのである。

### 空前絶後の論説

明治のはじめの頃であった。ある夏(明治四年)、君は北門新報の主筆になつて札幌(小樽)へ出かけていったことがある。この頃は未だ実業の方へは顔を出さないときではあつたが、君が名声というものもなかなか大したもので、今度兆民先生がおいでになるそうだが定めて豪い名論が出るに違ひなかろうと、皆々一日千秋の思いで待ち構えておつた。ところが初めておいでになつた先生が論説というのは、北海道へ来るものは必ず暑中(なつ)でも袷(あわせ)を用意すべし、という馬鹿馬鹿しい題であつたので、今度張り詰めておつた連中の心の弓は、グニヤグニヤと折れて呆然たる姿であつた。ところがこの論説というのは、先生が例の浴衣一枚で出かけていつて鼻風邪をひいたものであるから、大いに悟るところがあつて、この論説を書いたわけなのだそうだが、兆民でなければ決してこれを学ぶことができぬのである。

SAMPLE  
Shoshi Shinsai.com